神戸女子大学看護学部紀要　第２巻，1-10，2017年

◆総説

今どきの看護学生をどう育てるか

How to educate the nursing students today

玉木 敦子

Atsuko Tamaki

今どきの看護学生の特性について「物質的に満たされた世界に生きる」,「不確かな世の中に生きる」,「不確かな『私』」,「IT 化によるコミュニケーション能力の低下」という４つの視点から考察した．また，今どきの看護学生に対する教育について「若者が持つ強みを活かす」,「リアルな体験,他者とコミュニケーションをとる機会を積極的に設ける」,「安心して学べる環境と承認される経験を通して，学生の自立や自信の向上を促す」の３つの方法について述べた．さらに「今どきの看護学生」に求められる教育方法を具現化する取り組みとして,「学びのグループゼミ」を紹介した．

学生は成長する力，限りない能力を持っている．その力を育むためには，学生の特性を十分に理解し，それに応じた働きかけ方をする必要性が示唆された．

キーワード：看護学生，今どき，特性，看護教育
Key words : nursing student, today, characteristics, nursing education

Ⅰ．はじめに

最近の若者の特性とは,どのようなものなのだろうか．現代の若者の特性について述べられているいくつかの文献（藤本,2015；平田,2012；川上,2013；鍋田,2015；野崎,2013；齋藤,2013；吉武,2013）によれば,「おとなしい（消極的，主体性のなさ）」,「何を考えているかわからない」,「傷つきやすい」,「気が利かない，マイペース」,「不器用」,「真面目」,「素直でやさしい」,「物怖じしない」といった若者の特性が記されている．

ただし，いつの時代にも「最近の若者論」は存在しており，たとえば筆者自身もかつて「新人類」（1980 年代の若者）と呼ばれた世代である．「新人類」の特性として「命じられたことしかしない」,「自分勝手」,「敬語を使わない」,「休日出勤や残業を嫌がる」,「無感覚・無感動」,「派手」とされており，つまり若者はその時代の大人から否定的な印象を持たれる傾向にあることも忘れてはならない．

本稿では，今どきの看護学生について，その印象を一方的に述べるのではなく，実態調査によって示されたデータを用いるなど，できるだけ客観的事実に基づいた若者像を明らかにしたい．またその上で「今どきの看護学生」をどう育てれば良いのか，その教育方法について考察する．

神戸女子大学看護学部看護学科
Kobe Women’s University Faculty of Nursing

Ⅱ．「最近の若者」の特性とその背景にあるもの

最近の若者は自分自身をどのように認識しているのだろうか．2014 年に行われた新入社員意識調査によれば,「社会人としての自分に自信がある」特性は「協調性」,「責任感」,「忍耐力」であり，反対に「欠けている」特性は「創造力」,「積極性」,「体力,「社交性」という回答であった（三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング,2014）．これらは先述した若者の特性ともほぼ一致しており，すなわち周囲の評価と若者自身による自己評価とのズレはほとんどないと言えよう．

また先述の若者の特性は最近の看護学生にも認められている．柳川と矢吹（2010；2011）は，看護学生の生活や気質について 1987 年，2000 年，2009 年に調査を実施し，３時点の比較検討を行った．その結果，1987 年時点の看護学生より 2009 年時点の看護学生の方が炊事・洗濯などの身辺自律や社交性は低下しているが,辛抱強く,かつ真面目に課題に取り組む傾向や面倒見の良さなどの優しさは向上していたと報告している．

では，この背景には何があるのだろうか．最近の若者の特性に「ゆとり教育」が影響しているともいわれるが,果たして単純にそう考えて良いのだろうか．

ここでは，若者の特性について「物質的に満たされた世界に生きる」,「不確かな世の中に生きる」,「不確かな『私』」,「IT 化によるコミュニケーション能力の低下」という 4 つの視点から考察を試みたい．

1．物質的に満たされた世界に生きる

1）あふれるモノと情報

1970 年代の高度成長期，1980 年代のバブル経済を経て，現代は「成熟社会」と言われている．経済の不安定さはあるが，IT（Information Technology）環境の充実も相まって，モノと情報は溢れている．たとえば，Web 検索すれば莫大な量の情報を瞬時に手に入れることができる．限られた時間の中で自分が必要とするものや情報を得るために求められるのは，効率性とシステム化であろう．実際，Web 上にはあらゆるものに関するランキングサイトや「まとめ」サイトが存在し，大いに活用されている．また各通販サイトなどには，個人の検索履歴から，その人が好むであろう商品を「おすすめ」するシステムが当たり前のように組み込まれている．バーチャル・リアリティに関する技術も飛躍的に発展しており，パソコンやスマートフォンを操作するだけで，その場にいながら「リアル」な体験をすることも可能になっている．若者は生まれた時から以上述べたような環境に生きているので,「便利になった」のではなく，それらが当たり前のものと認識されているだろう．

看護学生の生活習慣と生活体験に関する調査結果（菱沼ら,2011）では，最近の看護学生は病人の世話，高齢者の世話，子どものオムツ換えなどの経験は少ないものの，ほとんどの学生に料理・掃除・洗濯等の経験はあることが示されている．ただし,たとえば湯船に入るとき,湯をかき回して入る学生は半数以下であり（自宅の風呂に自動保温機能があり，かき回す必要のない中で育ったため），生活体験がないというよりも生活習慣や体験の変化があることが報告されている．このような結果について，菱沼と大橋（2013）は，看護学生は自分なりに家事なども行っているが，そのやり方が自分の体を使わないでできるように，社会全体が変化していると捉えたほうが良いのではないかと述べている．

モノや情報が豊かに，かつ便利になることは望ましいことではあるが，一方でそのことによって，生活体験は減少あるいは変化し,我慢する必要性も少なくなる．また，人間から思考力や創造力を奪っているとも考えられる．

2）競争や自立が必要とされない環境

少子高齢化の世の中では，少ない子どもを親（時には祖父母を含んで）が密着して育てるようになる（高石，2009）．また高齢の親を世話する子どもの数も少なくなるので，親子ともに子の自立を求めなくなるだろう．たとえば，2008 年と 2012 年に実施された大学生を対象とした調査では,「保護者のアドバイスや意見に従うことが多い」という学生が 2008 年には 40.1%であったが 2012 年の調査では 45.9%に増加していた．同様に「困ったことがあると保護者が助けてくれる」（2008 年 41.5%→ 2012 年 49.0%),「お金が必要になったら保護者が援助してくれる」（2008 年 58.8%→ 2012 年 64.4%）という結果も示されていた．また 2015 年に実施された新成人を対象とした意識調査では,「自分を大人と思っていない」若者の割合は 74.0%であった（Benesse 教育研究開発センター,2013）．以上のデータからは，最近の若者の自立度がより低下している様相が伺えよう．

社会が成熟したことで，現代社会は，より個性が尊重されるようにもなっている．平成 4（1992）年の学習指導要領改訂によって「個性尊重教育」がスタートし，評価の仕方もそれまでの相対評価から絶対評価に変更された．それは今の大学生（2016 年現在）が生まれる前のことである．したがって，彼らにとって「個性尊重」は当然のこととして認識されているだろう．また少子化は若者にとって同年代の人口を減少させることにもなり，絶対評価の導入も相まって，競争する必要性も少なくなっていると思われる．

自立や競争の必要性の低下は,親や大人に反抗したり，葛藤を覚える機会，つまり成長の機会を減少させていると推測される．

3）物質的に満たされた世界を生きることが若者の特性に及ぼす影響

これまで述べたように，最近の社会状況の変化は，若者から「生活体験」,「我慢すること」,「思考や想像あるいは創造する機会」,「反抗や葛藤する機会」を奪っていると考えられる．それらはつまり，若者から生きるエネルギーを奪っているとも言える．現代の若者の特性とされる「意欲・積極性・主体性の低下」,「おとなしさ」,「マイペース」,「不器用」は，生きるエネルギーの低下によって説明可能と思われる．一方で反抗や葛藤が必要でなく，生きることに必死にならなくても良い環境は「協調性」,「優しさ」,「素直さ」,「真面目」という若者

表１　誕生からこれまでの出来事（平成 26 年現在　22 歳の若者の場合）

年代	年齢	年号	時代のニュース
就学前	0 歳	平成 4 年（1992）	バブル崩壊 学習指導要領改訂（個性尊重教育、相対評価から絶対評価へ）
	3 歳	平成 7 年（1995）	1.17 阪神大震災 3.20 地下鉄サリン事件
	4 歳	平成 8 年（1996）	携帯電話が普及 山一證券が倒産
	5 歳	平成 9 年（1997）	多くの企業でリストラが続く
	6 歳	平成 10 年（1998）	長野冬季オリンピックが開催される ウインドウズ 98 発売 iMac 発売
小学生	7 歳	平成 11 年（1999）	日産自動車がルノー傘下へ
	8 歳	平成 12 年（2000）	介護保険制度がはじまる
	9 歳	平成 13 年（2001）	ニューヨーク同時多発テロ
	10 歳	平成 14 年（2002）	住民基本台帳ネットワークが開始される **学習指導要領改訂（ゆとり教育）**
	11 歳	平成 15 年（2003）	景気の底（日経平均株価がバブル崩壊後最安値） イラク戦争開戦 地上デジタル放送が開始される
	12 歳	平成 16 年（2004）	自衛隊のイラク派遣が開始される 台風 22 号襲来する 新潟県中越地震（10/23）
高校生	16 歳	平成 20 年（2008）	アメリカのリーマン・ブラザースが経営破綻し、世界的金融危機につながる
	17 歳	平成 21 年（2009）	100 年に 1 度の不況の波が日本を襲う バラク・オバマ氏がアメリカ大統領に就任 ※ WTO、新型インフルエンザを「フェーズ 6」と引上げ、パンデミック（世界的大流行）を宣言
	18 歳	平成 22 年（2010）	9 月　国の借金が 900 兆円を突破（国民一人当たり 710 万円） 5 月　「iPad」が発売
大学生	19 歳	平成 23 年（2011）	3.11 東日本大震災 M9.0（震度 7） **学習指導要領改訂（脱ゆとり教育）**
	20 歳	平成 24 年（2012）	12 月：三陸沖地震 M7.4
	21 歳	平成 25 年（2013）	2020 東京オリンピック開催決定
	22 歳	平成 26 年（2014）	消費税 8%に増税 広島土砂災害（平成 26 年 8 月豪雨）／御嶽山噴火 11 月：長野県北部（神城断層）地震 M6.7
社会人	23 歳	平成 27 年（2015）	イスラム国（ISIL）による日本人拘束・殺害 平成 27 年関東・東北豪雨（鬼怒川、渋井川の決壊） パリ同時多発テロ
	24 歳	平成 28 年（2016）	マイナンバー制度運用開始 安全保障関連法施行 平成 28 年熊本地震 M7.3（震度 7） 7 月　選挙年齢「満 18 歳以上」に

の肯定的な特性を生み出しているとも考えられる．

２．不確かな世の中に生きる

１）社会も大人も信用できない

先述したように，現代は成熟社会である．豊かではあるが，今以上の経済成長を望むことは難しいとも言える．2014 年に行われた新入社員意識調査では，今と 10 年後の日本の状態を天気で表したとき，「晴れ」と思うものの割合は「今」が 7.0%,「10 年後」が 18.3%であった．同様に，「曇り」（今：70.6%→ 10 年後：43.1%），「雨」（今：18.8%→ 10 年後：28.3%），「嵐」（今：3.5%→ 10 年後：10.2%）という結果であった（三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング, 2014）．つまり，今も 10 年後も，「晴れ」よりも「雨」や「嵐」といった悪天候だと思う者が多かったのである．実は彼らが生まれた年（1992 年）にバブル経済が崩壊し，11 歳（2003 年）の時に景気の底（日経平均株価がバブル経済後最安値）が，また 16 歳の時（2008 年）にリーマンショックがあり，さらに 18 歳（2010 年）の時には国の借金が 900 兆円を突破している（表１）．そのような社会状況を生きてきた彼らにとって，日本の将来に希望を持てないのは仕方のないことなのかもしれない．

現代は少子高齢化社会でもある．若者人口は減少し続け，一方で高齢者人口は増大し続けている．したがって，今後ますます少なくなる若者が，より多くの高齢者を支えていかなければならない．若者が年金について思っていることに関する調査では，年金を「十分な額が貰えると思う」者の割合は 2.8%，「額は少ないが貰えると思う」は 44.7%，「貰えない可能性が高いと思う」は 43.4%，「絶対に貰えないと思う」は 9.1%という回答結果であった（三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング，2014）．ここにも，現代の若者が希望を持つことのできない現状や彼らの負担感が示されていると言えよう．

以上のように，若者にとって今の世の中は，日本の将来だけでなく，自分の老後にも希望を持つことが難しいものとなっている．また経済的問題だけでなく，連日のように様々な不祥事が報道される社会のなかで，若者がもはや社会や大人を信用できなくなっているのではないかとも考えられる．

２）努力する方向性を見失う

バブル経済の頃までは，「良い成績を取って，良い大学に入って，一流企業に就職すれば，終身雇用の後に十分な退職金が支払われ，その後は年金で悠々自適に暮らすことができる」と信じられていた．しかし，今は「リストラ」が一般用語になり，また一流企業でさえ破綻や吸収合併がいつやってくるかわからないことを皆が知っている．さらにグローバル化も急速に進んでおり，価値観も多様化する中で，たとえば高学歴や一流企業への就職など共通する理想像はもはや存在しないのかもしれない．

共通する理想像がないことは個性を活かした成長を促進するかもしれないが，若者にとって努力する方向性を見失うことにもつながるだろう（鍋田, 2015, p.125）．

３）不確かな世の中を生きることが若者の特性に及ぼす影響

これまで述べたように，若者には少子高齢化による漠然とした負担感があり，社会に成長が望めず不安定であること，グローバル化による多様な価値観も認められ，共通する理想像を持つことが困難な世の中である．これからどうなるかわからない，何を信じれば良いのかわからない社会，つまり不確かな世の中に現代の若者は生きているということができよう．このような状況では，無難に消極的に生きることもやむを得ないかもしれない．

不確かな世の中では，若者は努力する方向性を見失うとともに，希望を持つことも難しくなる．災害，世界各地の紛争，テロリズムの発生や，地球温暖化は漠然とした不安をさらに高めるだろう．ただし，社会や将来，災害が起これば明日さえも不確かな中，それは家族の絆を見直したり，家族を大事に思う気持ちにもつながる（鍋田, 2015, p.206）．

平成 28 年度の新入社員を対象にした調査によれば，「将来に向け今していること」の第１位は「貯金」（35.6%）であった．また働く目的についての調査では，最も回答率が高かったのは「楽しい生活をしたい」（41.7%）であり，「自分の能力をためす」（12.4%）を大きく上回っていた．これは消極性だけでなく，不確かな将来よりも，今を楽しみたいという若者の思いが反映された結果と考えられる．藤本（2015）は，最近の若者を「社会の恩恵を享受したことがない世代」とし，そのような若者たちが「今のつらさに耐えたところで，将来報われるとは限らない」と考えるのは当然であり，彼らが持っているのは「不確かな将来より今の充実」というマインドだと述べている．

一方で，社会も大人も信用できないことは，社会や大人を理想化しないことでもある．それは，大人や社会の権威を前にしても物怖じしないという特性も生み出すと考えられる（鍋田, 2015, p.127）．

３．不確かな「私」

１）葛藤する場面，叱られる機会，承認される機会が少ない

現代は核家族化が進み，また地域とのつながりも希薄化している．祖父母や親戚，様々な年代の地域住民との触れ合いが減り，多様な価値観を知る機会も減少している．また少子化は子ども同士で群れて遊ぶ機会も減少させている．多様な人との直接的な触れ合い，関わりが減れば，意見や価値観のぶつかり合いも少なくなり，つまり葛藤する場面も減少するであろう．同時に親以外の大人から叱られたり，承認される機会も少なくなっていると推測される．

人間は，他者との葛藤を経験することで，自分とは違う人の考え方や価値観を知るとともに自分自身への理解を深めていく．また，叱られたり承認されることによって，自分の課題や自分の長所，自分らしさを捉えていくものである．つまり現代社会は，子どもにとって自分自身を捉えること，人間的成長を困難にさせている状況にあると言える．

2）身体を動かさない，五感をバランスよく刺激しない

最近，外で遊ぶ子どもを見ることが減っている．子どもの数が減っているだけでなく，子どもをリスクから回避するために，外で遊ぶときに子どもだけにしてはならないという社会の風潮があることや，宅地開発などで遊び場が減っていることも影響しているだろう．また，ゲームソフトが次々に開発され，外で体を動かす遊びよりも，幼い頃からスマートフォンやゲーム機で遊ぶことが主流になっていることも関係しているように思われる．

子どもが，自然の中で，仲間と一緒に，体を使って遊ばないことは，子どもの成長に深刻な影響を及ぼすと考えられる（鍋田,2015,p.32）．身体を動かさないこと，五感をバランスよく刺激しないことによって運動能力，手先の器用さ，自然や相手に合わせるための調整力，さらに脳の健康な発達も阻害すると言われている．鍋田（2015,p.119）は，最近の若者に前頭葉機能の低下が認められること，つまり思考や判断力，統合する能力が低下していると報告している．そのことによって空気が読めない，相手の気持ちが読めないなどの「発達障害的コミュニケーション」（表2）を示す若者が増加しているとも述べている．

3）不確かな「私」が若者の特性に及ぼす影響

人との関わり方や遊び方が変化する中で，現代の子どもや若者は自分を捉えることが困難になっていると言われている（高石,2009；川上,2013）．そのことはつまり「不確かな『私』」を生きているとも言えよう．「不確かな『私』」というのは，私とは何者かが明確になるアイデンティティの確立と相対する状態であり，つまり自我が未熟な状態であることを示している．若者の未熟さは自己評価の低さや，たとえば幼児に見られるような根拠のない万能感に現れるかもしれない．また自分自身が捉えられなければ自分の思いを言葉にすることもできず，周囲の人にも「何を考えているかわからない」と思われるであろう．

自我の未熟さ，自己評価の低さ，自分自身が何を考えているのかさえ捉えられないということは，「不安になりやすい」，「些細なことでも傷つきやすい」，あるいは「無難に生きる」という若者の特性につながると考えられる．

4．IT化によるコミュニケーション能力の低下

1）新たな人とのつながり：SNSの利用

表2　発達障害的コミュニケーション

発達障害的コミュニケーションにみられる特徴
空気が読めない
相手の気持ちが読めない
相互性のない（一方的な）コミュニケーション
言葉に含まれる多様性を理解できない
言葉どおりの意味しか理解しない
想像できない
自分の気持ちを語ることが苦手
興味を持つものに偏りがある
ワンパターンで不器用

鍋田恭孝（2015）．『子どものまま中年化する若者たち』．東京，幻冬舎新書，p.119-121．より筆者作成．

人間には人とつながりたいという基本的欲求があるが，現代では少子化や地域社会とのつながりの希薄化などによって，積極的に求めなければ直接的な人との触れ合いは得られにくくなっている（藤本,2015,p.72）．ただし，現代の若者はSNS（Social Networking Service）を利用することで,新たな形で人とつながり合っている．ただし，彼らは生まれた時からネット社会に生きているので，それは「新たなつながり方」ではなく，ごく自然なこととして認識されているだろう．

ところで，若者に最も使われているコミュニケーションツールはスマートフォンから発信するツイッター，LINEが上位であると言われている．つまり，現代人はスマートフォンの電源を入れれば24時間誰とでもつながることのできる環境の中に生きている（藤本,2015）．しかし，24時間誰かとつながっている環境は果たして人間にとって心地良いものなのだろうか．若者を対象にした友人関係に関する調査では，「いつも友人とつながっているという感覚が好きだ」という問いに70.1%が「あてはまる」と回答していたが，一方で「(自分は)人からペースを崩されたくない」タイプであると回答した者が92.2%であったという結果も報告されている（公益社団法人 東京広告協会,2015）．いつもつながっていながら自分のペースも崩さないために，若者はどうしているのだろうか．

2）「浅く付き合いたい」若者

大学生を対象とした調査で，友人と「浅く付き合いたい」者は48.1%と約半数であったという結果が報告されている．また，授業の時だけ一緒にいる「授業友達」がいると回答した者が63.0%，以下同様に，テストの時だけ連絡を取る「テスト友達」がいる者39.8%，趣味の時だけしか会わない「趣味友達」がいる者33.5%，ご飯を食べるときにだけ会う「食事友達」がいる者26.1%，ネッ

ト上でしか話さない「ネット友達」がいる者22.9%という結果も報告されている（公益社団法人 東京広告協会, 2015）．つまり，人と浅く付き合いたいと思う若者は少なくないこと，そのために目的別の友達をもつなどの工夫を行っている様子が伺える．

現代のコミュニケーションスキルにおいて好ましいとされる属性について，斎藤（2013）は「メッセージ内容の軽さと短さ」,「リプライの即時性」,「頻繁かつ円滑なやりとり」,「笑いの要素」,「顔文字などメタメッセージの多用」,「キャラの明確さ」であると述べている．これらも若者の「浅い」付き合い方を表しているものと思われる．またそれだけでなく，これらのコミュニケーションスキルは，過度に効率性を求めたものとも言える．このような反射的・断片的なコミュニケーションを繰り返すことで，付き合いはますます浅くなり，コミュニケーション能力も低下すると思われる．

3）傷つくことへの恐れ

若者が浅い付き合いを求める理由は，効率性だけでなく，これまで述べてきたような若者の未熟さ，そのための傷つきやすさも関係していると考えられる．大学生の対人関係に関する意識を調査した結果では,「友だちを傷つけないように気を遣っている」と回答した者は78.6%,「仲間はずれにされないように話を合わせる」と回答した者は57.1%であった（Benesse教育研究開発センター, 2013）．また,新成人を対象に「自分のタイプ」を問うた調査では,「人に気を使うタイプ」85.5%,「不安な気持ちになりやすい」75.3%,「気持ちが滅入りやすい」74.2%,「親密な付き合いが苦手」55.3%という結果であった．また「いじめを体験したことがある」者が55.3%,「自殺を考えたことがある」者が41.5%という結果も報告されていた（楽天オーネット, 2015）．若者は自我の未熟さだけでなく，実際にいじめを受けた体験からも，自分が傷つかないように，他者を傷つけないように，結果として浅い人付き合いをしていると考えられる．さらにネット社会では,「炎上」や「ネットいじめ」がしばしば起こっており，そのことも若者の浅い人付き合いや「浮かないように気遣う」傾向を強めていると思われる（藤本, 2015, p.149）．

4）同質の仲間とだけつながる

平田(2012, p.21)は,最近の子どもたちにコミュニケーションに対する意欲の低下という問題が認められ，それはコミュニケーションに対する欲求，あるいは必要性が低下しているからではないかと述べている．たとえば，少子化によって多くの小学校では卒業するまでほとんどクラス替えがない.そのことによって教室に見知らぬ「他者」がいなくなり，言葉を使って表現しなくてもわかってくれるという環境があるという．

また最近の若者は，ひと世代前のようにSNSを社会に向けての自己表現ツールとして利用しておらず，あくまでも友達とのコミュニケーション手段として利用している（藤本, 2015, p.140）．世界中の人々とつながるツールがあっても，若者は同質の仲間とだけつながっているのである．

同質の仲間とだけつながる中では伝える努力も必要とされないし，伝えるための言葉も必要とされない．平田（2012）は「表現とは他者を必要とする」(p.24),「言語は言わなくて済むことは，言わないように言わないように変化するという法則を持っている」(p.22）という．他者に伝えようとする努力が必要とされない環境では，若者のコミュニケーション能力はなかなか発達しないであろう．

Ⅲ．今どきの看護学生をどう育てるか

1．現代の看護学生に求められる能力

これまで，現代の若者の特性について考察してきたが，では現代の看護学生に求められる能力とは何であろうか．ここではまず，学士課程教育においてコアとなる看護実践能力とグローバル社会に求められる能力からみていきたい．

1）学士課程教育においてコアとなる看護実践能力から

学士課程教育においてコアとなる看護実践能力は表3の通りである（文部科学省, 2011）．そこから見えてくる看護学生に求められる能力は「対人関係能力，コミュニケーション能力」,「判断力, 決断力, 実行力, 応用力」,「主体性，積極性，向上心」,「協調性，チームワーク，調整力」,「リーダーシップ」,「創造力」,「自信」といったものと言えよう．ただし，これらはすでに述べてきた若者の特性とは相対する能力であると思われる．

2）グローバル社会において求められる能力から

現代はグローバル社会であり，大学教育においてもグローバル化に積極的に取り組むことが求められている（文部科学省, 2009）．グローバル社会では，多様な文化背景を持つ人にも，きちんと自分の意見や主張を伝える

表３　学士課程教育においてコアとなる看護実践能力

Ⅰ群　ヒューマンケアの基本に関する実践能力
1）看護の対象となる人々の尊厳と権利を擁護する能力 2）実施する看護について説明し同意を得る能力 3）援助的関係を形成する能力
Ⅱ群　根拠に基づき看護を計画的に実践する能力
4）根拠に基づいた看護を提供する能力 5）計画的に看護を実践する能力 6）健康レベルを成長発達に応じて査定（Assessment）する能力 7）個人と家族の生活を査定（Assessment）する能力 8）地域の特性と健康課題を査定（Assessment）する能力 9）看護援助技術を適切に実施する能力
Ⅲ群　特定の健康課題に対応する実践能力
10）健康の保持増進と疾病を予防する能力 11）急激な健康破綻と回復過程にある人々を援助する能力 12）慢性疾患及び慢性的な健康課題を有する人々を援助する能力 13）終末期にある人々を援助する能力
Ⅳ群　ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力
14）保健医療福祉における看護活動と看護ケアの質を改善する能力 15）地域ケアの構築と看護機能の充実を図る能力 16）安全なケア環境を提供する能力 17）保健医療福祉における協働と連携をする能力 18）社会の動向を踏まえて看護を創造するための基礎となる能力
Ⅴ群　専門職者として研鑽し続ける基本能力
19）生涯にわたり継続して専門的能力を向上させる能力 20）看護専門職としての価値と専門性を発展させる能力

（文部科学省（2011).「平成 22 年度 先導的大学改革推進委託事業 看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関する調査研究報告書」より作成）

ことが求められる．グローバル化は価値観の多様化も促すが，様々な価値観を持つ人と関わり合うことは，つまり「わかり合うことが難しい」ということも意味している（平田, 2012)．いずれにせよ，グローバル社会に生きる若者には，高いコミュニケーション能力が求められていると言えよう．

以上のことから,現代の看護学生に求められる能力は,より高度になっていると考えられる．またそれらは最近の若者の特性と相対するものであるが，両者のギャップは今後ますます大きくなっていくと推測される．

２．看護学生の育て方

現代の看護学生に求められる能力と最近の若者の特性とのギャップが大きくなっている中で，われわれは看護学生たちをどう育てればよいのだろうか．ここでは,「若者が持つ強みを活かす」,「リアルな体験，他者とコミュニケーションをとる機会を積極的に設ける」,「安心して学べる環境と承認される経験を通して，学生の自立や自信の向上を促す」の３つの方法について述べる．

１）若者が持つ強みを活かす

これまで述べてきたように，最近の若者には，いくつもの強みが認められる．ひとつは，真面目に，忍耐強く取り組む力である．特に医療系学部の学生は，他学部の学生よりも勤勉であるという調査結果も報告されている（Benesse 教育研究開発センター, 2013)．齋藤(2013)は，最近の若者は明確な目標や指示があれば，やや困難な課題にも最後まで取り組み，リーダー役割を投げ出すこともないという．

また，協調性の高さはチームワークを伴う作業をスムーズに進めさせるであろう．一人で頑張って浮くのは嫌だが,みんなで一緒に頑張ることは得意なのである(齋藤, 2013, p.57)．

彼らはまた，素直で優しいという特性も持っている．仲間に対し，気遣いながらポジティブなメッセージを発信できる．また,「誰かのために」素直に頑張ることもできるという強みも持っている（藤本, 2015, p.215)．

以上のことから，目標や指示が明確になるよう工夫しながら，たとえばチームワークで取り組める課題を課すことで若者の能力を効果的に引き出せるのではないかと考えられる．

２）リアルな体験，他者とコミュニケーションをとる機会を積極的に設ける

これまで述べてきたように，最近の若者のコミュニケーション能力や社会性，生活能力の低下の背景には，社会環境の変化による生活体験の減少や，効率性やシステム化の追求が思考や想像あるいは創造する機会を奪っているという社会状況がある．そうであれば，上記の能力を育てるためには，若者がリアルな体験をしたり，他者とコミュニケーションをとる機会を積極的に設ける必要があるだろう（野崎, 2013)．

看護学生にとって実習は最も効果的な学習の機会であろう．実習でさまざまな現場に出向き，多様な人と出会う．また，患者と１対１の人間関係をリアルに経験し，患者の言葉や思いに耳を傾け，自己洞察しながら自分自身の体験を言葉にする．その体験を仲間や教員だけでなく，実習ではじめて出会った実習指導者にも言葉や実習記録で伝えなければならない．

実習を通して，自分自身の考え・思いを言葉で表現すること，あるいは他者とのディスカッションを通して多様な考え方を知り，また互いに認め合うことは，コミュニケーション能力や社会性を向上するための有効なトレーニングになると考えられる．

3）安心して学べる環境と承認される経験を通して，学生の自立や自信の向上を促す

先述したように,最近の若者の不安は高い傾向にあり，またその背景には社会状況だけでなく，未熟なパーソナリティがあると思われる．

したがって看護教育にも，まず学生が安心して学習できる環境づくりが求められるだろう．たとえば明確な目標設定や指示があること，安心して発言できる場，ポジティブな評価（ほめる，認めるなど），優しく丁寧なアドバイスなどが考えられる．また「今を楽しむ」傾向をもつ若者に対しては，厳しい態度で指導するよりも明るい雰囲気が求められよう（齋藤,2013,p.43）．

また未熟さがある学生は，いきなり放任されると不安が増すので，まず見守ることが必要であろう．学生の努力や目標の達成，学生の成長をともに認め合い，実感できるようにしながら，一歩ずつ自立を促す姿勢が求められる．

また人は他者から信じられなければ，自分を信じること，つまり自信をもつことはできない．筆者自身の教育経験から実感しているのは,学生がもつ自ら成長する力,限りない能力である．

学生を信頼すること，それが何より教育者に求められるものではないだろうか．

Ⅳ．神戸女子大学看護学部の取り組み：学びのグループゼミ

先述した「今どきの看護学生」に求められる教育方法を具現化する取り組みとして，筆者が所属する看護学科において専門科目として配置されている「学びのグループゼミ」を紹介したい．

1）学びのグループゼミとは（図1）

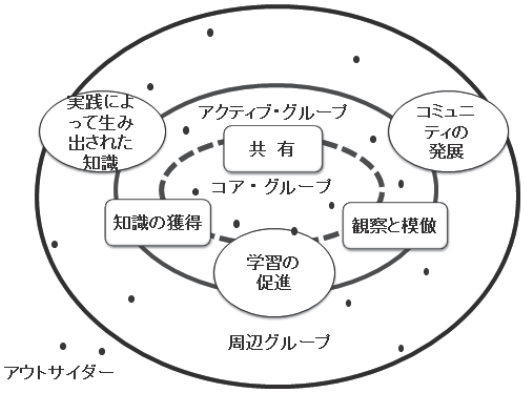
「学びのグループゼミ」とはコミュニティ・オブ・プラクティス（ウィンガー,マクダーモット,＆ スナイダー,2002）の考え方をもとに，グループにおける相互交流を通して学習を推進するしくみを取り入れた授業である．この授業では，1年生から4年生の学生でグループを構成し，同級生との横の繋がりだけではなく，上級生，下級生との縦の繋がりのなかで看護の学びを共有することをねらいとしている（2016年現在開設2年目のため，現時点で在学する学生は1，2年生のみ）．たとえば，上級生が実習等での経験を下級生へ伝え，あるいは上級生から下級生がアドバイスを受けることで，学び合いのコミュニティを発展させたり，経験知の共有により学習を促進し，コミュニケーション能力を向上させることなどが期待されている．

学生のコミュニティの参加の仕方には「コア・グループ」,「アクティブ・グループ」,「周辺グループ」という3つのレベルがあり，また教員は授業を計画したり，メンバーを結びつける「コーディネーター」，コミュニティを取り巻く「アウトサイダー」としての役割を担っている．

2）学びのグループゼミを通して

ここでは,「学びのグループゼミ」における学生の学びについて，筆者が担当しているグループが1年次実習科目での学びをテーマとして取り組んだ時の様子から紹介する．

この時の課題と授業の進め方は，コーディネーターの教員によるアドバイスを適宜受けながら，コア・グループの学生が主体となって考えたものである．この日の流れは，まず2年生が自分たちの実習体験を1年生（この時点で実習は未体験）に伝え，1年生がそれをもとに2年生の実習での学びをまとめ，発表するというもので



参加の仕方	役　割
コア・グループ	コミュニティの中心的存在の学生。コミュニティに積極的に参加し、取り組むべきテーマを特定し、コミュニティを取り組むべき課題に沿って導く。
アクティブ・グループ	コア・グループほど熱心ではないが、積極的にコミュニティに参加する学生。
周辺グループ	コア、アクティブ・メンバーたちの交流を見守りながら、自分なりの洞察や学びを得る学生。
コーディネーター	授業を計画し、メンバーを結びつける教員。
アウトサイダー	コミュニティのメンバーではないが、コミュニティに関心を持つ者。主に教員。実習指導者が参加することもある。

図1　「学びのグループゼミ」の構造

（ウェンガー，E.，マクダーモット，R.，&，W.M.，野村恭彦監修，櫻井祐子訳（2002）.『コミュニティ・オブ・プラクティス』．東京，翔泳社，p99-102を参考に作成）

あった．なお複数の担当教員が教室内にいたが，グループの外にアウトサイダーとして参加していた．

授業の中でコア・メンバーは責任をもって役割を果たそうとし，アクティブ，周辺メンバーの学生も互いに協力し合うなど，学生主体に真面目に取り組む姿がみられた．たとえば，2年生は1年生に自分たちの実習体験を生き生きと伝えており，1年生も2年生の実習体験に耳を傾け，必死にメモを取る様子があった．私語をする学生はおらず，どの学生も集中して取り組んでおり，1年生からは2年生の実習体験を「知りたいという意欲」が，また2年生からは1年生を気遣う「優しさ」や「伝えたいという意欲」が感じられた．さらに学生たちの相互作用を通して徐々に場が和み，全体的に発言が増えていく様子もみられた.中にはあまり発言しない学生もいたが，発言する学生に視線を向けてうなずくなど，全員が参加している様子が伺えた．

発表場面では，まだ実習に行っていない1年生が2年生の体験を自分の言葉で語っており，それに全員が耳を傾けていた．最後に，2年生のコア・メンバーが全体のまとめとして「1年生が自分たちの話をしっかり聞いて，たくさん質問してくれて嬉しかったです．ありがとう.」と満面の笑みで語っていたのが印象的であった．

以上の様子から，この「学びのグループゼミ」では，学生たちの真面目に課題に取り組む力やチームワークに必要とされる協調性が発揮されていたこと，互いを気遣いポジティブなメッセージを送るという若者にみられる強みも生かされていたことがわかる．この授業回では特に，実習体験というリアルで，かつすべての学生にとって最も関心の高いテーマに取り組んだことも学習効果を高める要因になったであろう．また，自分の話を真剣に聞いてもらい，自分の体験が他者に伝わる，あるいは理解されることは承認される経験になったと考えられる．さらに，このグループでは，教員はアウトサイダーとして学生たちをグループの外から見守っていたのだが，学生にとって，それは安心して学べる環境として機能していたのではないだろうか．

Ⅴ．結論

今どきの看護学生の特性について「物質的に満たされた世界に生きる」,「不確かな世の中に生きる」,「不確かな『私』」,「IT化によるコミュニケーション能力の低下」という4つの視点から考察した．また，今どきの看護学生に対する教育について「若者が持つ強みを活かす」,「リアルな体験，他者とコミュニケーションをとる機会を積極的に設ける」,「安心して学べる環境と承認される経験を通して，学生の自立や自信の向上を促す」の3つの方法について述べた．さらに「今どきの看護学生」に求められる教育方法を具現化する取り組みとして,「学びのグループゼミ」を紹介した．

学生は成長する力，限りない能力を持っている．その力を育むためには，学生の特性を十分に理解し，それに応じた働きかけ方をする必要性が示唆された．

本稿は，神戸女子大学看護学部が主催した第1回臨地実習指導者研修会（平成28年7月12日開催）の講演内容に一部加筆修正したものである．

文献

Benesse教育研究開発センター（2013).「第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書」, http://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3160（閲覧日：2016年6月11日).

藤本耕平(2015).『つくし世代:「新しい若者」の価値観を読む』. 東京，光文社新書.

平田オリザ(2012).『わかりあえないことから:コミュニケーション能力とは何か』. 東京，講談社新書.

菱沼典子，佐居由美，大久保暢子，石本亜希子，佐竹澄子，安ヶ平伸枝，大橋久美子，伊藤美奈子，蜂ケ崎令子（2011）．看護系大学1年生の生活習慣と生活体験に関する全国調査，聖路加看護学会誌，15(1), 27-34.

菱沼典子，大橋久美子（2013）．看護学生の生活体験：生活習慣の現状と教員からみた特徴，看護教育，54(1), 42-48.

川上華代(2013)．現代学生の特徴と学生相談についての一考察：問題や症状が維持され，変わらない学生の姿から見えてくるもの．和光大学現代人間学部紀要，6, 141-153.

公益社団法人 東京広告協会（2015).「大学生意識調査結果報告書」, http://www.tokyo-ad.or.jp/activity/seminar/pdf/FUTURE2015.pdf (閲覧日 : 2016年6月11日).

三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング（2014).「新入社員意識調査アンケート結果」, http://www.murc.jp/thinktank/economy/analysis/research/report_140502.pdf（閲覧日：2016年6月11日).

文部科学省（2009).「中長期的な大学教育の在り方に関する第一次報告：大学教育の構造転換に向けて」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1269944.htm（閲覧日：2016年6月11日).

文部科学省（2011).「平成22年度 先導的大学改革推進委託事

業　看護系大学におけるモデル・コア・カリキュラム導入に関する調査研究報告書」, http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/1307331.htm（閲覧日：2016 年 6 月 11 日）.

鍋田恭孝（2015）.『子どものまま中年化する若者たち』. 東京, 幻冬舎新書.

日本経済青年協議会（2016）.「平成 28 年度新入社員『働くことへの意識』調査結果」, http://activity.jpc-net.jp/detail/lrw/activity001478/attached.pdf（閲覧日：2016 年 6 月 11 日）.

野崎真奈美（2013）. 現代の学生の特徴と対応の留意点, 助産雑誌, 67(8), 634-637.

楽天オーネット（2015）.「第 20 回新成人意識調査」, http://onet.rakuten.co.jp/company/activity/report/research/print/20150105.pdf（閲覧日：2016 年 6 月 11 日）.

齋藤孝（2013）.『若者の取扱説明書』. 東京, PHP 新書.

斎藤環（2013）.『承認をめぐる病』. 東京, 日本評論社.

高石恭子（2009）. 現代学生のこころの育ちと高等教育に求められるこれからの学生支援, 京都大学高等教育研究, 15, 79-88.

ウェンガー, E., マクダーモット, R., &, W.M., 野村恭彦監修, 櫻井祐子訳（2002）.『コミュニティ・オブ・プラクティス』. 東京, 翔泳社.

柳川育子, 矢吹明子（2010）. 現代の看護学生の生活および気質の特徴（第 1 報）：2009 年と 2000 年及び 1987 年との比較. 京都市立看護短期大学紀要, 35, 197-211.

柳川育子, 矢吹明子（2011）. 現代看護学生の生活および気質の特徴 第 2 報（次元別解析）：1987 年, 2000 年及び 2009 年の比較. 京都市立看護短期大学紀要, 36, 61-68.

吉武清實（2013）. 学生相談室から見えてくる現代の学生気質. 日本看護学教育学会誌, 23(2), 57-59.